

飼料の工夫と管理で 成績アップ!

CASE STUDY

受精卵移植(ET)技術の発達により、搾乳牛から産まれてくる和牛子牛が増えてきている。このように酪農家から生産された和牛子牛は、約10日齢のヌレ子や3カ月齢のスマール子牛として肥育農家に引き取られる。今回はスマール子牛を導入し、十分な腹作りを行うことで優秀な肥育成績を上げている事例を紹介する。



所在地:九州地方 飼養頭数:和牛肥育牛300頭 従業員数:3名

スマール子牛の雌を導入

今回紹介する農場は、黒毛和種約300頭の肥育農場である。特筆すべきは、そのほとんどが雌で、3〜4カ月齢のスマール子牛を導入し、肥育していることだ。スマール子牛導入のメリットは、肥育を意識した給与体系で育成期を飼育できる部分にある。

栄養は良質なチモシーで

育成期は牧草で牛を太らせることを意識している。4〜9カ月齢時の配合飼料給与量は2kg/日に抑え、良質なチモシーと稲わらを混合して最低でも4kg/日は食わせ込む。特にチモシーについては質、量ともに十分なものを与えるよう意識をしている。一時期、オーツヘイを使用していたが、肥育期にビタミンA(VA)不足になりやすかったことから、高価となっても良質なチモシーを使用することが農場の給与体系にはあっているという。

10カ月齢時点での体重は、250kg前後とのことであった。内臓や骨格が発育する8カ月齢では、筋肉があまりついていないため痩せて見える。しかし、体高と肋張りが優れており、余分な脂肪がついていない。つまり、今後の肥育で十分な発育をすすめるための下地が完成しているのだ(写真1)。

「雌の育成期は足が長いほうが、将来的に枝重がとれる(写真2)」と農場長は話す。

ただし、このような飼育方法が可能なのは雌のみで、去勢と同様のことをすると尿石のリスクが高まるとのことであった。

肥育期は肉質管理がポイント

肥育に向けた腹作りが済んだ牛は、配合飼料の給与量が最大となる15〜17カ月齢には、11kg/日は最低摂取できるようにしている。育成期をしっかりと過ごしてきていれば、その後の管理は楽になるとのこと。肥育期に意識するのは肉質で、VAコントロールのため、14カ月齢および22カ月齢に全頭の血液検査を実施している。一頭ごとに体質などが異なることを理解し、血液検査の結果から個別に対処を行うことが安定した成績を残す要因になっている。

肥育期においても粗飼料の重要性は高い。細かく牛と飼槽を観察しながら、2回、3回と稲わらを追加する。そうすることで、より多くの配合飼料を食い込ませ、育成期の頃からは見違える発育をする(写真3)。

重視しているVAコントロール

2013年は、平均枝肉重量が465kg、上物率85%と非常に肉質成績が優れていた。その一方で、事故のリスクとは隣り合わせであった。そこで14年はVAコントロールを調整し、事故率の低下や

枝肉重量をとる方向にシフトしている。7月までの成績は、平均枝肉重量486kg、上物率77.5%と、去勢と比較しても遜色のないものとなっている。スマール子牛からの肥育は、枝肉になるまで長く飼う必要があるが、それを補う発育と肉質を手にすることができている可能性がある。

写真1. 肋張りが優れている子牛

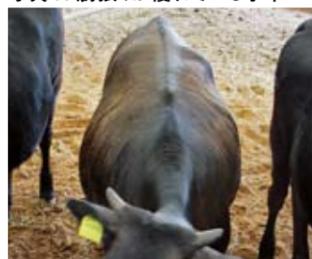


写真2. 育成期の雌牛の状態



写真3. 肥育後期の様子

